

【書評】



『イノベーション・マネジメント - プロセス・組織の構造化から考える』

野城 智也 著

一般財団法人東京大学出版会

平成 28 年 5 月 30 日刊

A 5 判・420 頁

本体価格 4,800 円 + 税

イノベーションは企業の経営者たちにとって企業の成長・存続のため大変重要であるという認識が高いことは言うまでもない。にもかかわらず、過去の20年間の日本のイノベーションは、それ以前の日本と比べてみても、また、諸外国と比べてみても総体的にみれば低調であると認識せざるを得ないとしている。本書はこの問題をプロセスと組織の構造化から考察している。

本書は4部から構成されている。

第1部は、本書におけるイノベーションの定義を提示し、また、イノベーションは技術の革新ではなく、刷新ないし変革であることを強調している。さらに、本書において用いる共通の下敷きとなるメタモデルとして、IPMモデル(イノベーション・プロセス・メタモデル)と価値創成網を提示している。第1部および第2部では筆者は、建築技術者としての知見を背景に「やりようの設計事例集」という示し方をしている。第3部においては、IPMモデル、価値創成網を下敷きにして、現代社会における多様なイノベーションのやりようを描き出し、イノベーションの類型を示している。第4部では、第1部と同様、IPMモデル、価値創成網を用いて、イノベーション・プロセスを推進させていくためのアプローチ(攻め口)を解説している。第5部では、第1部から4部で整理した知見をふまえて、日本の現状を概観し、イノベーションを進めていくためにはどのような戦略をとるべきかについて考察している。

本書では筆者の造語である「豊益潤福」、「国民皆革」という概念を用いて、「豊益」から「潤福」を増進するという発想に立った変革及び「国民皆革」による変革の必要性を説いている。

最終章では筆者による概観・考察をもとに、今後日本がとるべき戦略について6つの提言を示している。大きな技術革命及び社会の枠組の変化が進行する時代において慣行的なやり方(プロセス)や旧態依然とした組織の枠組(価値創成網)を踏襲しては後世からのそしりを受けると説く。日本の未来のために新たなイノベーションのやりようが試みられなければ、新たなやりように係わる経験知がたまらないので、さらに遅れをとるという負のスパイラルに何とか歯止めをかけたいという強い思いが感じられる。

日本の経営者、経営者としてしっかりと向き合う必要のある公認会計士にとって、さらに多くの社会人の方々にとって、本書は大変有用であると位置づける。

以上のことから、協会学術賞に値するものとして選定した。

著者の略歴

野城 智也（やしろ ともなり）

昭和32年 東京都生まれ

昭和60年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了（工学博士）
建設省建築研究所研究員

平成2年 建設省建築研究所主任研究員

平成3年 武蔵工業大学建築学科助教授

（平成6～7年 University of Reading 客員研究員）

平成10年 東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学専攻助教授

平成11年 東京大学生産技術研究所助教授

平成13年 東京大学生産技術研究所教授

平成21年 東京大学生産技術研究所所長（平成24年まで）

平成25年 東京大学副学長（平成28年まで）

現 在 東京大学生産技術研究所教授

[主な著書]

- ・ サービス・プロバイダー 都市再生の新産業論（単著）
- ・ 実践のための技術倫理 責任あるコーポレート・ガバナンスのために（共著）
- ・ 住宅にも履歴書の時代 住宅履歴情報のある家が当たり前になる（共著）
- ・ 建築ものづくり論 Architecture as “Architecture”（共著）
- ・ 生活用IoTがわかる本 暮らしのモノをインターネットでつなぐイノベーションとその課題（共著）